

上演⑦ 高田高校「色々々々々々々」

七色の虹をモチーフに、オズの魔法使いやレインボーといった語呂合わせを用いながら「多様性」というテーマを明確に押し出している作品であった。等身大の高校生としての演技の積み上げもしっかりなされており、生きることに不器用なそれぞれのキャラクターの特色が見事に演じられていた。舞台上は教室の机をあでやかに装飾することで文化祭前の雰囲気を作り出し、その奥に七色の旗を吊り下げることによって演劇的な見せ方がなされていた。

この物語では登場人物の身に付ける「色」が重要である。旗に虹本来の色にはないピンクを掲げたのは、自己主張の強いクラス室長のモモだった。彼女が身に付けたピンクは虐待する母親が押し付けたものであると同時に、似合うと認めてくれた母の愛と自己肯定を意味するとも解釈できた。しかしモモは、「その呪縛を外した方がいい」と最後まで寄り添ってくれた親友ユウまでも遠ざけてしまう。ユウは、モモに合わせてつけていたマスクを外し、ピンクの旗をモモに返すことで、友人関係を断ち切るという表現がなされるのだった。

多様性を尊重しつつも、他人が抱える「色々」なものの背景に立ち入らず、まさに「見えない」まま曖昧に人間関係が続くというような現実を暗示させる場面が多く、非常にリアルに迫る内容だった。一方で、表面化する生徒自身と家庭が抱える問題が、作品に対して重すぎるテーマとなっていないか、ささいなことでも当人にとっては大問題であるような事情を扱うこともまたリアルなのではないか、という意見も出た。

モモはその後どうなったのか、観る側に委ねられた結末のように感じられた。しかし、二人でやるはずの漫才を一人でする場面や、うずくまったモモをほかの登場人物が取り囲みそれぞれのカラーの旗をモモにかけて徐々に覆い隠していくラストシーンは、その孤独を一層際立たせる描写として圧巻であった。